



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

乳幼児は世界を どう理解しているか

実験で読みとく赤ちゃんの心

外山紀子・中島伸子

乳幼児の知的能力を明らかにするため、発達心理学ではさまざまな研究法が考えられてきた。そのなかでも本書は実験に焦点を絞り、心理・物理・生物領域の理解と自己、記憶の発達をとりあげている。

乳幼児対象の実験は難しい。研究者には実験法や課題をひねり出すアイデアと忍耐力が求められる。乳児の言語能力には限りがあるし、幼児はどんな質問にも「はい」と答えるやっかいなバイアスをもっている。質問の趣旨がわからなくても、答えをひねり出して

きて答えたりもする。研究者としては○という能力を測定していたつもりが、実際には△を測定していたなんてこともザラである。

しかし、だからこそ実験面白い。論文を読んでいると、「この手があったか!」「してやられた!」とうならされる実験に出会うことがある。そんな驚き(と嫉妬)を覚える実験を紹介しながら、乳幼児の豊かで潜在力あふれる知的世界を描こうとしたのが本書である。ひとりでも多くの方この驚きを共有できれば幸いである。



共著 外山紀子・中島伸子

発行 新曜社

四六判 / 264 頁

定価 本体 2,400 円十税

発行年月 2013 年 3 月

とやま のりこ

早稲田大学人間科学学術院教授。専門は発達心理学。著書はほかに『発達としての共食：社会的な食のはじまり』(新曜社)、『子どもと食：食育を超える』(共編、東京大学出版会)など。

なかしま のぶこ

新潟大学教育学部准教授。専門は発達心理学。著書はほかに『知識獲得の過程：科学的概念の獲得と教育』(風間書房)、『子どもの認知発達』(共訳、新曜社)など。

人生の意味の心理学

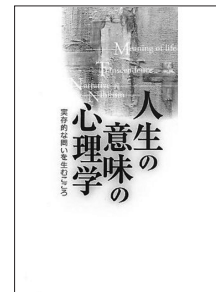
実存的な問いを生むところ

浦田 悠

生きていることの意味や目的への問いは、生老病死の様々な局面で、重要かつ深刻な問いとなり得るものです。この人生の意味の問題は、実証的な心理学では哲学的な問題として敬遠される一方で、哲学では素人的な概念として軽視される向きが近年まで続きましたが、とりわけ今世紀に入って以降は、ポジティブ心理学やナラティブ心理学、進化心理学などの比較的新しい領域で、意味の問題が真剣に取り上げられることも増えてきました。本書は、人が意味をどのように問い、どう答えるのかと

いうことについて、主に心理学に軸足を置きつつ、哲学と心理学のそれぞれの議論や知見を踏まえながら筆者が行ってきた研究をまとめたものです。

第1部では、哲学的な議論と心理学的な知見を概観し、第2部では意味の喪失・意味への問い・意味の追求と実現に関する筆者の質的・量的研究をまとめています。そして第3部では、哲学の枠組みと心理学の知見を合わせたモデルを構成しています。本書が、幸福や生きがい、ウェルビーイングに関心のある方の一助となれば幸いです。



著 浦田悠

発行 京都大学学術出版会

A5 判 / 360 頁

定価 本体 4,400 円十税

発行年月 2013 年 3 月

うらた ゆう

京都大学大学院教育学研究科研究員、立命館大学：生存学研究センター客員研究員。専門は生涯発達心理学。著書はほかに『自己心理学の最先端：自己の構造と機能を科学する』(分担執筆、あいら出版)、『カウンセリング心理学』(分担執筆、おうふう)、『質的心理学の方法：語りなきく』(分担執筆、新曜社)、『コーチング心理学ハンドブック』(共訳、金子書房)など。



訳 橋彌和秀
発行 勁草書房
四六判 / 184 頁
定価 本体 2,700 円十税
発行年月 2013 年 7 月

はしや かずひで
九州大学人間環境学研究院准教授。専門は比較発達心理学。著書はほかに『インタラクションの境界と接続：サル・人・会話研究から』（分担執筆，昭和堂），『知覚・認知の発達心理学入門：実験で探る乳児の認識世界』（分担執筆，北大路書房），『読む目・読まれる目：視線理解の進化と発達の心理学』（分担執筆，東京大学出版会）など。

ヒトはなぜ協力するのか

橋彌和秀

「自著」でないのでは面はゆいが、翻訳者として読んで頂きたいことに間違いはないので、編集部のお声掛けに感謝し紹介をさせていただく。言語・コミュニケーションの発達や進化を議論する際に、マイケル・トマセロの研究を抜きにすることは今や難しい。その影響は心理学のみならず、神経科学・社会科学や哲学にまで及んでいる。本書は2008年スタンフォード大におけるトマセロ自身の特別講義と、シルク、デック、スキームズ、スベルキという4人の論者による論評とをまとめた *Why we cooperate* (2009, MIT Press) の全

訳である。「協力」や「共感」は、心理学に留まらず多様な領域の連携のもとで近年飛躍的な展開を見せている研究領域だ。この領域で、理論的な考察を十分踏まえつつ、洗練された自然科学的な実験へと現象を落とし込み、ヒトの社会や文化が備える特性の起源に至る議論へと着実な歩みを進めた立役者の一人がトマセロであるといえる。寄せられたスベルキのコメントにある通り、「これからの10年」の研究を展望する上でも重要な意味を持つ議論が、このコンパクトな本には盛り込まれていると思う。



共編 岡昌之・生田倫子・
妙木浩之
発行 新曜社
四六判 / 304 頁
定価 本体 3,400 円十税
発行年月 2013 年 9 月

おか まさゆき
首都大学東京・東京都立大学名誉教授。専門は臨床心理学。著書はほかに『心理臨床の創造力：援助的対話の心得と妙味』（新曜社），『臨床心理学とは何だろうか：基本を学び、考える』（分担執筆，新曜社），『遊戯療法の研究』（分担執筆，誠信書房），『学生のための心理相談：大学カウンセラーからのメッセージ』（分担執筆，培風館）など。

心理療法の交差点

精神分析・認知行動療法・家族療法・ナラティブセラピー

岡 昌之

心理療法が多様なのは、人間の多様性、文化、社会、個人の人間的特質の多様性があるからである。一言で言えば、心理療法とは人間的コミュニケーションによる関係の微調整であり、クライアントがより良い生活、人間関係を生きられるようなキッカケを与える、知性的および感性的な一連の体験の構造化である。それは必然的に、人間の文化の微細な様相に関わり、それゆえに工学や医学の得意とする科学・技術的過程の単純明快さとは、異なる様相を表すことになる。

以上は、本書の「まえがき」の

冒頭であるが、本書の特質を表して余すところがない。「交差点」とは、まさに多様な要素が交錯し相互に影響を与えあう状況を表すメタファーである。精神分析、認知行動療法、短期・家族療法、ナラティブ・セラピーという多彩な分野の権威・中堅のセラピストが心理療法の本質をめぐって熾烈な論議と悠々の交歓を試みた興味深いプロセスをたどることは、そのまま各心理療法への入門にもなり、また心理療法とは何かという大きなテーマに関する思索を呼び起こす刺激にもなる。